

大友宗麟の実像



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】

第8回

宗麟の築いたまち「府内」

戦国時代、宗麟は南蛮貿易を盛んに行い、その拠点となった豊後府内(現大分市)は大いに繁栄。まちにはヨーロッパ、東南アジア、中国などの品々があふれ、往来にはさまざまな国の人が行き交っていました。

象や虎など、当時としては珍しい動物も持ち込まれていたようです。

府内のまちは、大友館を中心に道路が東西南北に格子状につくられ、道路に沿って40余りのまちがありました。その規模は南北約2・1キロメートル、東西約0・7キロメートルの範囲におよび、現在の長浜町から元町周辺となります。

平成8年から本格的に始まった発掘調査の結果によると、当時の府内は、武家屋敷と商家が混在しており、「洛中洛外図屏風」に描かれる戦国時代の京都のまちに似たものであったと考えられます。また、戦国大名の館を中心とするまちと商業貿易都市がひとつになった、珍しい特徴も持っていたといえます。西の小京都と呼ばれた戦国大名大内氏の支配した「山口」や国際貿易都市として繁栄した「堺」、「博多」と肩を並べるまちだったのです。

府内は、キリスト教宣教師の記録の中でも、織田信長の「安土」や豊臣秀吉の「大坂」などと同等に扱われる、日本を代表する大都市であったことがうかがえます。



古地図・明治期の地籍図などを基に当時の府内を想像して描いた図(部分)
東には大分川が流れ、大友館を中心に家々が並び当時の府内の繁栄がうかがえます。
(現長浜町から元町付近)